

寺田寅彦なら・・・

関 直 彦

この度、丸山先生が寄せられた論文について、丹治代表から「寺田寅彦の立場なら如何になるか」について何か書いて欲しいとのご依頼を頂いた。S T A P細胞の真偽や可能性について全くの素人、しかも文系の元サラリーマンである私がそれを評したり、云々する立場ではないので、大いに躊躇せざるを得ない。しかし一方で、無責任な新聞報道による騒ぎや、理研を中心とする釈然としない対応を見るにつけ、小保方さんや、自死された笹井氏にいささか同情を禁じ得ない。そこで、かつて理研の主任研究員でもあった私の祖父・寅彦が、深い思い遣りをもって多くの若い研究者を育て上げ、一流の学者として世に送り出したことが思い起される。

寅彦は今回話題になった「ネイチャー誌」を中学生の頃から購読しており、物理学者になってからは、X線回折に関する論文を始め、同誌に何度か研究発表をしているので、永い縁がある。寅彦の専門は地球物理学と実験物理学であるが、S T A P細胞は実験の繰り返しにより発見するものという点で実験物理学と共通している。大正13年、年来の親友で、同年齢の理化学研究所の三代目所長・大河内正敏からの誘いで主任研究員として理研に入所した。寅彦は大学での鬱陶しい人間関係や、学術と関係ない管理上の雑務に嫌気がさして、大学を辞めたかったがなかなか受け入れてもらえず、兼任であった。大学で「懐手して宇宙見物」のような自由な研究に従事することは難しかったが、大河内所長のもと、自由闊達な活動を快く認める理研では、線香花火、墨流し、金平糖などユニークな研究を続けることができた。研究で赤字が出ても補填してくれるし、大きな設備はともかく、伝票一枚で倉庫にある備品や資材を調達できた。勤務時間も自由で、形式的な義務は一切なかったという。その頃、大学を卒業したばかりの研究員が理研に多くいて、そういう若者が毎週木曜日の午後に寺田研究室を中心に集まって、コロキウムと称する欧米文献の輪読会を催していた。寅彦はいつも西洋菓子を買ってきて、論文の説明を終えた後、茶菓で高度な話がはずんだという。このサークルは「寺田小学校」と称されて、晩年まで続いた。今の理研はどうであろうか。

寅彦は漱石から受けた温かい思い遣りを、自分のお弟子さんたちに繋げている。東大教授の傍ら、地震研究所、航空研究所、理研などで中谷宇吉郎を始め、地震学者の坪井忠二、形態学の平田森三、海洋学の宇田道隆、分光学の藤岡由夫など、数多くの弟子を抱え、世に送り出していた。人柄が良いだけでは研究者は育たず、研究者に課題を与える能力が優れていなければならない。寅彦が学士院で発表した論文は単独で執筆したものは少なく、弟子を指導しつつ進めた共同研究が多く、対等の共著であった。共同著者として助手たちを世に出すためである。「長とつくものにはなりたくない。人の首を切らなければならなく

なるから」という優しさを持っている。漱石の則天去私、つまり天道に則って私心を去るという人生観に近付こうと努めていた寅彦の名誉欲は希薄であった。お弟子さんたちが育つのを見守ることが、最大の楽しみであったかもしれない。かくして寅彦はお弟子さんたちに非常に慕われ、没後も「寅彦会」が寅彦の誕生日に毎年開催されて、近年まで続いていた。

また寅彦が書いた漱石の追悼文で「先生から色々のものを教えられた。俳句の技工を教わったことだけでなく、自然の美しさを自分自身の眼で発見することを教わった。おなじようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものを見分け、そして真なるものを愛し、偽なるものを憎むべきことを教えられた」と述べている。そこで権威や権力に対して強く反発することもあった。恩師であり、帝王といわれた長岡半太郎のカミナリは有名で、弟子の指導ではよく雷を落とし、ひどく叱られて卒倒しかけた者も出たほど。寅彦は原子論の研究など、一面で長岡を尊敬していたものの、錬金術師のような軽率な面には大いに不快感を抱いており、公然と諫めることがあったという。地震研究所で長岡先生の講演が終わったところで、すくっと立ち上がり「先生の今日の御講演は、全く出鱈目であります」と抗議し、激しくやりあった。後で理研に帰り、「先生が変なことを言ったり、書いたりしたときに、弟子が黙っていることは悪いことだ。当然ご注意しなければいかんのだ。これが弟子たるものの義務だ。僕もそのうち、そうなるから少し変だと思ったら、『先生この頃おぼけになりましたね』と言ってくれたまえ。本人にはわからんから」と弟子たちに述べたという。長岡はある時、寅彦の弟子に「僕らは努力努力でやってきたんじやが、寺田君は天才だからな」と大声で皮肉ったそうである。

もし小保方さんが寅彦の弟子であったら、実験と論文を温かい眼で指導し、間違いのないように導いたであろう。寅彦は「ルクレチウスと科学」の中で、「経験によって明確に否定されないすべての可能性は、すべて真であり得ることを認容してかからねばならない。この事は意外にも却って往々にして現時の科学者によって忘却される」と書いている。小保方さんはあくどいことをする人には見えず、また不正を働く悪い人とも思えないが、勇み足があったのだろうか。丸山先生が書いているように、未だ「捏造」と断定されたわけではない。若い優秀な才能が抹殺されないよう、そしてS T A P細胞の再現が成功することを願っている。

「京都漱石の會会報「虞美人草第14号」編集丹治伊津子代表」より